

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「ユニバーサル・ツーリズム」とは何か：共同研究：  
「障害」概念の再検討：  
触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 広瀬, 浩二郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00008479">https://doi.org/10.15021/00008479</a>

共同研究 ● 「障害」概念の再検討—触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて

## 共同研究プロジェクトの課題と展望

2016年4月に障害者差別解消法が施行された。これをきっかけとして、さまざまな場面で障害者に対する「合理的配慮」のあり方が模索されるようになった。多くの大学で障害学生支援室が設置され、障害の有無に関係なく、多様な学生が「ともに学ぶ」環境整備が進んでいる。公共図書館でも合理的配慮の発想を導入し、従来の障害者サービスを刷新する動きが見られる。

一方、博物館の障害者対応は遅れているのが現状である。2016年度に開始された本共同研究「『障害』概念の再検討」では、障害者が主体的、能動的にミュージアムを楽しむための合理的配慮を提案することを目標に掲げている。前回の共同研究「触文化に関する人類学的研究」（2012～14年度）の成果として、広瀬編『ひとが優しい博物館』（青弓社、2016年）が刊行された。本書は各地の博物館の「さわる展示」、触覚を活用するワークショップの最新事例を集めたもので、日本におけるユニバーサル・ミュージアムの入門書ともなっている。博物館での合理的配慮を検討する場合、本書が議論の出発点となるのは間違いない。

3年間の共同研究を深化させるには、引き続き国内外のミュージアムの実践に学び、具体例を収集・分析することが不可欠だろう。他方、議論の幅を広げるために、他分野との比較を試みることも重要だと考える。博物館との比較という観点で、本共同研究では「観光のユニバーサル化」に注目している。近年、「ユニバーサル・ツーリズム」（以下、UTと略記）という言葉が耳にする機会が増えた。2020年のオリンピック・パラリンピックの東京開催が呼び水となり、各方面でユニバーサル化を求める声が高まっている。UTとは、障害者や外国人をはじめ、さまざまな人々のニーズに配慮した旅行・観光という意味で用いられる。

しかし、そもそもユニバーサルとは何なのかが曖昧であり、



いわきのユニバーサルツアーにて。温泉街のまちあるきを楽しむ（2017年2月、石塚裕子撮影）。

UTもやや安易に使われている印象を受ける。新しい理念が普及・定着する際、十人十色の解釈が許容されるのは悪いことではない。とはいえ、UTが文字どおり「誰もが楽しめる旅行・観光」を具現する理論となり、成熟・発展していくためには、早い段階でその基本要素を整理すべきだろう。私は「触文化」をキーワードとして、2009年以来、ユニバーサル・ミュージアムの具体像を探る共同研究を積み重ねてきた。一連の共同研究で培った知見を観光に応用することにより、UTを明確に定義できると確信している。オリンピック・パラリンピックのブームに惑わされず、日本社会に合理的配慮を広く深く根付かせるために、本共同研究が果たす役割はきわめて大きい。

## 「ごちゃませツアー」で互いの違いを知る

2016年度、私は「被災地ツーリズムのユニバーサル化」をテーマとする石塚裕子（大阪大学）のプロジェクトに加わり、福島県いわき市でUTのツアー企画・実施に協力した。いわきの過去・現在・未来を取り上げる3回のツアーを組み立てる中で、あらためてユニバーサルの真意を考えることができた。各ツアーには視覚障害者、車いす使用の肢体不自由者が複数参加した。一般に、視覚障害者は視覚情報を得にくいので、バスによる長距離移動を伴う視察が苦手である。可能な範囲でバスを降り、自分の足で現地を歩く。風や音、においを感じながら、さわれる物は手で確かめる。これが視覚に頼らない観光の醍醐味だろう。

それに対し、車いす使用者はリフト付きバスを利用しても、バスの乗り降りに時間と労力を要する。乗車・降車が繰り返されると、彼らの肉体的・精神的疲労を増幅させてしまう。視覚障害者の旅行ではガイドヘルパー（移動介助者）の手配が最重要であり、それが確保できれば、ホテル、トイレなど、ハード面の心配はほとんどない。車いす使用者の場合は、移動経路のチェック、多目的トイレの位置確認など、事前準備が必要である。

このように、同じ障害者といっても、視覚障害者と肢体不自由者の特性はまったく異なることに気づく。視覚障害、車いすの両方の要望に応えようとすれば、結果的に両者ともに中途半端な楽しみ方しかできないことになる。「ユニバーサル＝誰もが楽しめる」を実現するのは、じつに難しい。いわきでの試行錯誤を通じて、さまざまな障害者のニーズに応じるツアーは、内容・規模もさまざまであり、1つにまとめるのは困難だと実感した。

一方、種々雑多な障害者が同じツアーに参加することによって、プラスの効果を得られる事実も明記しておこう。「障害」とは、マジョリティがマイノリティに貼り付けたレッテルであり、「社会的不利益を被っている」という点を除けば、各障害者に共通する属性はない。だからこそとすべきか、いわきのツアーは視覚障害者、肢体不自由者それぞれが自身の意見を述べ、互いの違いを知る貴重な異文化間対話のチャ

ンスともなった。だが、「ごちゃませ」のおもしろさはあくまでも副産物であり、それはUTの本義ではないことも忘れてはなるまい。以下では、いわきでの経験も踏まえ、UTを構想する3つの視座を提示したい。

### ユニバーサルを具体化する3つの視座

1. 「with」：重度身体障害者の自立支援に長年携わり、今回のいわきツアーの立案にも関わったある福祉事業所の施設長は、次のような感想を述べている。「これまで、生きることので精いっぱいだった重度障害者が旅行を楽しめる時代になったのはすばらしい」。このコメントは、重度障害者の生存権保障を願い活動してきた彼の本音だろう。いわゆる自立生活運動は、障害者が健常者と同じように、地域で「普通」に暮らせる環境作りをめざしてきた。自立生活の理念を敷衍すれば、障害者が健常者と同じく「普通」に旅行できるのがUTということになる。たしかに、前述したように移動経路やトイレの問題をクリアできれば、ツアーのメニューを大きく変更することなく、肢体不自由者も十分に観光を楽しめる。同様に、手話通訳者がいれば、ろう者も「普通」に旅行できるだろう。

ところが、視覚障害者は事情が違う。近代以降、「より多く、より速く」という価値観が流布し、人間の情報入手方法は視覚に依存するようになった。観光でも「見る」ことが中心に位置づけられるようになり、視覚障害者が「普通」にツアー参加しにくい状況が生まれた。彼らが主体的、能動的に旅行を楽しむためには、必然的にツアーメニューを大幅に変更しなければならない。健常者（マジョリティ）が障害者（マイノリティ）を包含し、社会全体が「普通」であることを指向する。この思想を体現する語が「with」（ともに）である。「with」はユニバーサルの必須要件だが、視覚障害者の旅行は、「with」だけでは解決できない根本的な問いを内包しているともいえる。

2. 「for」：国立民族学博物館（民博）では2006年以来、視覚障害がある来館者の展示体験をサポートするプログラムを提供している。各展示場のさわられる資料を選定し、視覚障害者を案内するのはMMP（みんぱくミュージアムパートナーズ）である。本プログラムは館内の教職員の協力の下、拡大・進化を続けてきた。盲学校の修学旅行等でMMPの展示ガイドを希望するケースも増えている。2017年3月26日には、某旅行社が募集した視覚障害者向けツアーの団体が民博を訪れた。全国から集まった9名の視覚障害者が、MMPとともに民博の触察ツアーを満喫した。

MMPが担当するプログラムは、視覚障害者専用（for the blind）である。それゆえ、視覚障害者のペースでじっくり展示を体感することができる。1点ずつゆっくり丁寧に触学・触楽する視覚障害者の展示体験は、通常の健常者の見学スタイルとは異質である。MMPのプログラムは無料だが、旅行社が販売する障害者向けツアーは、対象が限定されるため、どうしても高額となってしまふ。介助者の旅行代金の一部を障害当事者が負担しなければならないツアーも多い。それでも、障害者のために運用されるバリアフリーツアーには、マイノリティが主体的、能動的に参加できる魅力がある。世間では、バリアフリーよりもインクルーシブ、ユニバーサルの方が1歩進んでいるという認識を持つ人が少なくない。しかし、マイノリティの立場を尊重し、「for」の精神に徹するという点で、



大震災の津波で流されたテトラポットを触察する。表面には貝殻が付着している（2017年3月、さかいひろこ撮影）。

バリアフリーの視座は今後も大切にしていかなければならないだろう。

3. 「from」：私は「with」と「for」の不十分な点を補うのが「from」であり、この「from」こそがUTの眼目だと考えている。UTが商業ベースで成り立つためには、健常者にとっても楽しめるツアーでなければならない。旅行を通して障害者の気持ちによりそうのは大事だが、介助の延長ではツアー参加の積極的動機とはならないだろう。

ここで参考となるのがユニバーサル・ミュージアムの先行事例である。「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」（DID）は、暗闇の中で視覚障害者がアテンド役となり、健常者を案内するエンターテインメントとして、ドイツで誕生した。視覚障害者の導きにより、健常者は暗闇で視覚以外の感覚の潜在力を発見する。DIDは視覚障害者発（from the blind）のユニバーサルなイベントといえるだろう。2016年7月～11月、兵庫県立美術館で企画展「つなぐ×つむむ×つかむ——無視覚流鑑賞の極意」が開催された。来場者がアイマスクを着けて、彫刻作品を触察する展示である。私はプロデューサー兼アドバイザーとして本展に全面協力し、音声ガイドのコンテンツ製作も行なった。「無視覚流」とは、視覚を使わない新たな美術鑑賞法である。たくさんの健常者が本展に足を運び、無視覚流の意義を評価してくれた。

観光は、博物館の展示やイベントとは相違する側面も有している。だが、「from」の視座を観光に取り入れ、ユニークなツアーを実施することは可能なのではないか。「with」や「for」の主体は健常者（マジョリティ）になりがちである。「from」（障害者発）の観光プランがどこまで健常者を引き付け、巻き込んでいけるのか。更なる実験の蓄積に期待したい。「with」と「for」は、従来の法制度でもある程度規定されていたが、「from」はまだこれからという段階だろう。合理的配慮は、「from」を支え育てる新しい社会規範となるはずである。2017年度以降の本共同研究では、「from」の視座に基づくUTを定着させるためには何が必要なのか、理論的検討を続けていきたい。

#### ひろせ こうじろう

国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授。筑波大学附属盲学校から京都大学に進学。同大学院にて文学博士号取得。専門は日本宗教史、触文化論。視覚に頼らない知的探究の技法として、「手学問」を提唱する。主な著書に『さわる文化への招待』（世界思想社 2009年）、「身体でみる異文化」（臨川書店 2015年）などがある。